

## 共同での子育てを实践するシングルマザーにみる育児サポートの獲得 90年代におけるシェア居住の事例から

○永田夏来（兵庫教育大学大学院学校教育研究科）

### 1. 目的と背景

本報告では、1990年代から2000年代にかけて東京都内で実践されていた、未婚の男女と子育て中のシングルマザーらによる2例のシェア居住について、母親がどのような育児のサポートを同居者を含む周囲のネットワークから得ていたかを中心に考察する。この実践はすでに20年以上の時間が経過しており、ミニコミ誌などを中心に当事者が自身の経験を語る機会に恵まれていた。こうした状況があるため、当事者が自身の経験を整理して俯瞰的に語る枠組みをある程度持ち合わせていると思われる。彼らの語りを通じ、シェア居住およびその周辺におけるコミュニケーションやサポートの内実に接近することが本報告の目的となる。また、本事例はそれ自体が非常にユニークなものであるため、過去の経験を記述することを本研究の副次的な目的とした。

### 2. 方法

本研究で主に使用するデータは、1990年代における共同子育ての経験を持つシングルマザーのAさんおよびBさんに2018年の8月と12月に実施したインタビューのトランスクリプトデータである。他に、関係者による手記などのテキスト、当時の様子が撮影されたビデオなども随時参照した。インタビューは半構造化にて一人2-3時間程度実施し、共同での子育ての概要、保育人からどのようなサポートを得ていたか、実施に至る経緯、共同での子育ての内実について話を聞いた。

### 3. 分析と結果

AさんとBさんは平日の日中は子供を保育園に預けて仕事をしていたが、夫や実家をはじめとする親族のサポートに頼らない前提のもとにシェア居住を選択している。育児サポートが今日ほど十分ではない当時において、夜間の外出など自分の時間を確保したいと考えた場合には、友人に代表される非親族のネットワークからのサポートを獲得するのが現実的であろう。ここで元からの知人などを活用せず、育児サポートを目的としたネットワークを新しく構築していったという経緯が本事例のユニークな点である。

また、今回のインタビューからは、外部のネットワークから子育てに関するサポートと同居者のサポートとの違いについての語りを得ることができた。サポートの提供者と母子との関係性によって、サポートの内容や活用の仕方が柔軟に変化しているのである。例えば、同居をしていない保育者に対しては母親から明示的な依頼がなされ、託児のサポートが主に期待されていた。これに対し、同居している者については、母親が不在のときに子供の身の回りの世話をする、遊び相手や話し相手になるなど、明示的に依頼されないものの日々の生活のなかで生じるニーズに対するサポートを担っている様子が語られた。

これらのことは、手段的サポートと情緒的サポートの両方において、非親族のネットワークが活用されているという実態を示している。これまでの育児サポートに関する計量研究では、手段的サポートは親族から獲得されることが多いが情緒的サポートでは友人など非親族からの寄与も大きいことが論じられてきた（山根 2017）。20人程度の多様な非親族が常に関わっていた本研究の事例では、手段・情緒どちらのサポートにも親族を活用しないという選択の上で、非親族の共同保育によるサポートのきめ細やかな使い分けが示されている。これは親族と非親族のサポートが代替的であるとのメカニズムの可能性を示すものと考えられる。

### 文献

山根真理, 2017, 「育児援助ネットワーク研究の視点：地域と親族関係」『日本家政学会誌』68: 439-445.

### 謝辞

本報告は蔦谷匠（海洋研究開発機構）との共同調査に基づいたものである。調査・報告の実施にあたり、蔦谷は上廣倫理財団、永田は（公財）ユニバーサル財団よりそれぞれ助成を受けている。

（キーワード：シェアハウス、育児サポート、シングルマザー）